



内

アール
イスト新聞拾得
米國人李仙得之傳

134 13



114
A 4458



李仙得の傳

明治十一年刊行

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

キヤルレスダブリーゼン
李仙得之傳

李仙得、暹羅西國ノ出生ニシテ、
 學校ニ入リ、其後、
 氏ノ家ハ連綿タル家柄ニシテ、
 勞アリテ大イニ衆人ノ尊敬ヲ受タル人々多ク、
 リ當時ニ於テモ其親族ハ大蔵及ヒ陸軍ノ重職ノ勤メ
 リ同氏ハ廿ニ歳ニシテ米國紐約府ニテ有福且ツ著名
 ナル法律家ノ女ヲ娶リテ妻トナセリ、
 一揆蜂起ノ時同氏ハ官軍ノ世子ラルブルンサカ
 海岸回メノ隊ニ付屬シ、此有名ナル世子ヲ以テ指揮ニシ
 タカ、北カカリナニ於テ屢々交戦シ翌六十二年、
 ノソノ島ヲ攻メ、此勲功ノタメ同年二月前ノ國

務卿ハニトシテ氏及紐育府知事ジョルジ、ア
氏其外高尾ノ人ニ會議シ紐育州ニ衆会ヲ設ケ
大イニ人民ヲ會同シ協議ノ後チ左ノ賞答ノ與ヘラレ
タリ

此度ロノノックノ一揆鎮定ハハツツ氏ポツトル氏
キンボル氏及リゼントル氏ノ勲勞ニ並ニ茹四名ノ
引率レタル茅九ガラント茅五十一レツトノ
取ハ總テ紐育州人民ニ永ク記念ス

此時同氏ハリウヂヤニトテ指揮スル歩兵隊
レシマン、之佐官タリ
以下李任氏ノ武勇ヲ説ク
戰地ニシタル
六行ニ北カロリナ州ニウボルレ

カ三

及ヒ有育トニ負傷ス同
サイト氏ノ指揮スル
州ニ交戦セリ
ルコツツ氏ノ指揮ヲ
チラル、ブルンサ
イノスブル
属レシ
セルマン氏ノ隊ニ
ニ茲テ茅九新兵隊
レタリシカ
セリウイ
指揮
戦争ニ
開業
二日目ニ
銃丸ノ
左眼及

鼻庄 孫ハタリ因テアンナホリノ病院ニ入
リ療養セリ也子ルリ氏ガリラント(南堂)東後襲
撃時李氏ハ市街警備ヲヲ托セラレシ一當時開議
中ナリシマリラント州會ヨリ各帰順 意ヲ示シ
アンナホリト退去ノヲ同氏へ懇請セリ然ルニ元未
彼軍ハ皆一揆ノ者共ナリセハ容易一信ニ示シト虽
モ先ツ其事ヲ聞入レ置キ然レテ李氏ハ彼等ノ謀スル
旨ニ忤ハスレテ返答レタル懸ノ當否 周知スル
炮臺ハ毎ク後順ナル人氏守リ 勉勵以テ速ニ修
造コシナシハ汝等モ如定ニ協 助スル
ハロロ 兵ノ指揮人ハ民ヲ 救ヘキト命セ
此隊ハ既ニ外難ノ警備 設ケシモノナリ同六
月 揆ノ兵アンナホリト退去ス 同六

津

可分ノ工

約議

仙得 仙得 仙得 照會

月十九日ノヲナリケ

破船ノ場所分ノタノ 同島ニ 十日ニ経テ帰
港ニ直ニ事ノ轉心ヲモカ 母船ノ水手皆英ニ北京
在留米国公使ヨリ報レ併テ白氏ノモ 是ヲ諒
人ヲ警戒セシムルヲ説カス 軍ニ我リ武城 彼等ニ
示シ懇篤ノ約束ヲ結ハ 一ヲ忘トス 然ルニ 公使ヨ
リハ政府ノ准許ヲ得ルノ容易ナラズ 又支那政府及ヒ
同島西部ノ半種鹿(但蛮人ハ此半種鹿人ヨリ當 然
彈藥等ヲ購ヒ得ルナリ)タノ助カナクシテ独リ他國ノ
兵ヲ以テ聖州ノ總東ヲ治スハ敢テ好マレキヲナラサ
シトス 方官ニ旅テモ蛮人所分ノ一等閑ニ

内記

打過 水ハ提督ハ愈々蛮人征討 一ヲ決心シ
 二般ノ軍艦ニ水兵ヲ載セ同島へ差向ケタリケドタイン
 フエビジル及及ヒセ子タルリセンドル氏モ全行セリ
 儲モ總軍ヲナルニリ島ノ南海岸ヨリ上陸ノ際
 蛮人ノ襲撃ニ遇ヒ暫時炮發ノ後其地ヲ引ヒテ此時
 士官マケンジ一氏ヲ夫ハリ李仙舟氏ハ此報ヲ聞キ否
 ゴンボート一艘ヲ増サン一ノ水師提督ノ折カ
 ラ米利堅政府ヨリノ指令北京公使ニ送
 左ノ書翰ヲ李氏ニ送

暴害者ヲ警戒セシム儀ハ
 分ニ後殘酷ノ可業

請求ニシテ一艦

表上ト

免檢ヲ得ル同氏ノ醫師ノ言ヨリ
 免檢ノ水ハ航海ノ為ニ死
 一ヲ望ムハ行柄幸ニ翌年清國厦
 淡水鷄籠台湾府打狗ノ一渡ル儀等モ主任シタリ因
 テ同年七月リウムルポーニ向ケルトシテ夫
 ヲリ英國及ヒ其他ノ各同ヲ巡回シ淫略ヲ歴テ同年十
 二月任所ニ著セリ間モオノ翌年ノ始メツガ 米國人
 ノ竊入タル佛朗西船ヲ一ウマルビ号ニテ不正物ヲ載
 ヒ竊ニ出港セシメテ探知シ忽チ右船ノ雇主ヲ河
 審問ノ末全ク奴隸高賣タルヲ判然セルニヨリ罰金及
 禁錮ヲ命ジタリ

此ノ所利ニ逃ヒタル人ニ責任セラレト云フ

此以... 港ニガテ米人ノ右様不正ナル商業ヲナス
者ヲキニ至リシ、竊モ同氏ノ功ニ依レリト云ベシ偶
千八百六十七年六月十二日米國帆前船ロウル号フ
ラルモサ島 南隅ニ方、十二里沖ノ方ニアル
ス、レトト 暗礁ノタメ破船シ船主及妻水夫共一同
端舟ニ乗リ移リ幸クレテ同島ノ南方 岬ニ陸モシ
ニゴールワ蛮人ノ為ニ暴殺ニ遇ヒタル事誰有
知ルモノナカリレニ其折支那ノ人一人與合セシ
若ヨリ始メテ事ノ次第ハ内知 又其ト船ヲルモラ
ノ、弓同島逃海ニテ混雜ノ群同 一ルル水夫
ニ上陸セシニ六人等與合セシ 地放セシニ
トカ、一人 夫ヲタメ負傷シ、リ、目
土 亦蛮人 炮撃シ直ニ其地 去、ナ、此

同氏大ニ失望セリ因テ同氏根達 及航シ
讀曰軍艦ヲ有シ、ニ、軍ヲ十日ヲ遣ヤゴ
レタリ時下八百六十七年九月三日、リ同氏ハ右
ンホートニ駕、川五、厦門、船ヲ、六日、台湾府
へ著レ直ニ出兵ノ、地方官、商、レ、十日
ニ至リ漸ク談判ヲ遂ゲリ仍テ司令官長劉氏ト共ニ兵
ヲ引キ蛮地ニ向ケ出發、ホ、ニ、著セリ、此、
ル、ニ、達スル間ニ土人牡丹社(千八百七十二年琉球人
ヲ暴害シ土人ナリ)ア、テ、森々タル高山、
殆、艱難ナリ僅カニ、嶺、ノ、通路アルノ、支那人ハ云
マ、ゲ、セ、ナ、ク、西、部、ニ、土、人、(、種、属、)ニ、モ、曾、テ、注、意、ス、ル、ナ、ト
ナ、シ、
所、テ、海、
一、手、ハ、恰、モ、大、風、ノ、氣、候、ニ、向、テ、海

上波 陸地へシテクヲ得スレテ引還レタル報知至
リケハ支那官一人李氏ニ向ヒ中様ハ僅カノ陸兵
ノ進撃ストモ難路トシテ、旁ク不利ナル旨ヲ述タレ
トモ李氏ハ更ニ所キ入レスレテ兵士ニ命シ木ヲ伐倒
シ草ヲ薙深キ道路ヲ修レ漸クニテ九月廿二日ホ
ルニ著セリ一体此兵ノ河南人ヲ以テ編制シ各
條銃ヲ持テリ中ニ大妃ノ一隊英船重兵アリ備モ此ノ
如キ不意迅速ナル進撃ノクメ壯胆不共記テ者共
ヲ招集シ屈強ノ兵千五百人ヲ集メテ歸順ガ支那兵合セ
テ二千二百五十人トナリ是ヨリ荷ニ李氏廈門出
テ前同流エニス商船ニ乗シテ李氏及ヒピケ
半程僊人ノ村ニ泊ルセシメ土人ヲ説得サ
琅璫 至リテ此兩人ニ出令セリ此度不意

ノ地盤ヲ一ツ
シ垂人等大半ニ恐怖セシ旨崇極属人ヲ注
直ニ使ヲ以テ土人ニ送リ、在漢難船保護ノ約束
ヲ取括シテヲ表シセハ何事ニ穩便ニシヘキ旨ヲ述ヘ
タリ酋長ノ答 願クニ中意ノ地ニ於テ出會商議スヘ
シト且欠禮ノ罪ヲ李氏ニ謝セリ且一月十日、方出
會シ如意條約ヲ取括ヘリ併テ同時ニ混雜人ノ内除命
シタル婦人ホント氏及ヒ被害者一展シタル種々高價
物品共李氏ハ引渡セリ同十月廿一日支那ノ軍兵各、
台灣府ニ引上テ李氏ハ廈門ノ帰港ス夫ヨリ李氏ハ事
ノ結局ヲ巨細ニ認メ十一月七日北京公使ハ報知セリ
其頃支那ノ内地ニ撥騷擾ノ際ニ會シテ右ノ書信延達
漸ク三月三日付ニテ當時代理公使ウケルリヤ

大 女 宮

氏ヨリ華盛頓府ニ報申スルニ至リテトゾ
其以前千八百六十八年一月廿日華盛頓府在留英國公
使ハ女王ノ命ヲ以テ李氏ヲフルモサ島蛮地所分ノ儀
ニ付称誉ノ書翰ヲ回ワレ氏ハ送ラレシカト未タ同氏
ノ儀ニ付何タルトモ北京ヨリ報知ナキ旨ヲ回ワレド
氏答ヘラレシトゾ長寄在港ノ合衆国水師提督バート
氏ヨリモ李氏ハ贊称ノ書翰ヲ送レリ

折テ李仙得氏ハ廈門在勤中折々蛮人ノ書信應答惹ラ
サリシ千八百六十八年同六十九年ニ兩度蛮地ヲ巡察
セリ爾後ハ四ヶ月半ノ巡回ヲ為セリ同氏ノ巡察シタ
ル世ニ有益ノ事ハ亦漏ラレズルニシテ、レ、レ、レ、千
八百六十九年同行ニ詳カナルカフルニ同島ノ箇ヲ附
シ島ノ地方ヨリ南方ニ至リ細密ニ區分セリ其島ノ生

スル所ニ此石岩石礦物其外各種ノ見本トシテ需用物ノ
類ニ衣服鏡燧銃器具等ニ至ルニテ委々聚産シ其後紐育
府ノ博物館ニ納メリ且同氏 著シタルフルモサ島
ノ箇ハ合衆国海軍測量司ニテ出板セラレシ其後再ニ
一ノ小冊ニシテ發兌シ書名ヲ臺灣蕃地所屬論ト云フ
フルモサ島蛮地所分ノ後李氏ノ功ノ左ニ校稿ノ表
ニテ明瞭ナリ

- 第一 千八百六十九年クローリヤン港ニテ船シタ
ルバシ山島人廿二人 土人保護ヲ得タリ
- 第二 千八百六十九年ノ才同島ノ東向ニ於テホ
ン氏ノ船難破ニ至リ同氏ハ入水セシナレトモ
錢リノ乗組人上陸シタル者共ハ悉ク土人ノ保

護ヲ得タリ

第三、英船マインドンカムトル号破船ノ節水夫共悉ク保護ヲ受タリ

茲一千八百七十一年九月六日フラルモサ島ノ東海岸ニテ破船シタル日本国琉球人六十八人ハ牡丹社人ノ夕ノ悉く殺シ遇ヒタル報知厦門ニ到リ李氏之ヲ聞ク否直ニ米田船アレロツト号ニ駕シ同島ニ渡航ハ其同行ニハ軍艦々長及ヒ醫師一人測量師一人水夫一人写真師一人通辨官一人ヲ伴ヘリ上陸ノ後直ニ日本人殺害ニ遇ヒシ場所ニ赴キ事ノ由ヲ尋問スルニ土人曰ハ千八百六十七年ノ約定ニ支那人保護スヘキ旨ノ明文ノキニヨリ琉球人ヲハ支那ノ下ノ保護ニ殺害セシト辨解アリト云フ抑モ李氏ハ此度ノ蕃民諮問ニ自世間ハ何タニ報告モナサレリレカト随行ノ又々ヲ以テモ

自カヨ也然トナリ北京公使館及ヒ支那政府ニテモ同氏ヲ稱賛セザルコト得サルニ至リテ斯テ千八百六十七年同氏ト土人トノ間ニ取結ビタル同類人保護且ツ神速ニ交付ノ儀ニ自米利堅政府及ヒ支那政府ノ評決ヲ得タキ旨屢ニ建言セレテアリレト虽モ一モ採用セラレザリシハ全ク上海總領事セワルド氏カ助ケセザリシ故ニゾアリレ夫故ニ李氏ハ此後同島ニ渡航シ不能ニ至リシヲ見テ知ルベシ不得止ヨリ李氏ハ直ニ華盛頓政府ニ稟申スルコトニナリ遂ニハ北京在留公使ロウ氏ノ怨望ヲ承セリ夫カタニ李氏ノ屢々困難セルコトヲ聞ク見聞セリ

〔世子ラハ李仙得傳ノ続キ〕

李氏ヲ支那ニ在ルヤ首ニシテ必請買買及ニ台湾蕃民ノ事件ヲ整理シ頗ル其処置ニ且キヲ阿タリレカハ支那人民ノ氏ヲ尊重信依スレトモ亦浅カラス大ニ國人ノ心ヲ得タリ氏カ厦門ニ在テ奉獻スルト六ヶ年其間官ノ救助ヲ請フ者アル時ハ何人ニ限ラス皆適宜ノ保護ヲ加ヘ毫モ之ヲ忌諱スルノ色ナカリキ

此ニ其例ヲ出^キケンニ氏ガ始メテ此地ニ着セシ時米同法教師等ノ未タ其住家ナキ若アコレカハ氏大ニ之ヲ哀レニ且チニ適宜ノ地所ヲ與ニ此ニ杜廉ノ堂宇ヲ建築セシメタリ今該港ニ在ル者是レナリ左レド氏カ救助スル所強チ米國人ノ此ニ止ラム他ノ國人ニ於テモ亦斯ノ如シ夫ノ大北電信会社ノ厦門ニ一支局ヲ創立

スルヲ得タルガ如キハ一ニ氏ガ庇蔭ニ依ルモノトス
該社ノ開店セシ地所ハ米國領事館ノ前面ナリレカ之
レニ付テ一奇談アリ氏ガ厦門ヲ別辞セシ後或ル人電
信陸線ヲ以テ合衆國領事館ト海岸各局トノ間ニ連接
セシニ其所為ノ頗フル不注意ニ出ルヲ以テ立刻ニ該
電信会社ト地方官府トノ間ニ協議ヲ上シ遂ニ支那人
ハ当所ノ海底線ヲ採起レテ之ヲ廢棄セントラ談社ニ
通ルニ至レリ此時ニ於ラゼ子ラル李仙得ハ既ニ厦門
ヲ去リテ職ヲ日本ニ奉スルト虽モ亦此ニ關係アルヲ
以テ別々其事照會ヲ受ケタリ當時東京長壽河ノ電信
線始メテ竣工シ未タ通信ノ業ニ開カスト虽モ該件ニ
付キ至急ノ回答ヲ厦門ニ送ルノ以テ切ナルヲ以テ氏直
チニ之ヲ政府ニ上請シ別々日本電線ヲ使ハスルノ免

凶土

許ヲ得タリ之レニ曰テ見ルニ東京ヨリノ直チニ支那ニ
通信セタル此般ノ電報ハ南支那ノ大方世界ノ間ニ電
機ノ通信ヲ開キタル第一著ヲ云フ云々ト云ノベキ如シ氏
ハ斯ク大北電信會社ニ由カク與ヘシト虽モ其本國ナ
ル丁林政府ヨリハ行等ノ謝辞ヲモ受テサリレト
云

斯ノ如ク氏ハ事ノ細大ヲ問ハス支那人ト交通スルノ
道ヲ勉メタル氏亦常ニ彼等ノ為メニ忌憚セラレ、事
アルヲ思ヒ曾テ自個ノ意見ヲ貫徹センカ為メ、其聽
従ヲ足スナレシ是ヲ以テ氏カ其目途ヲ行ハントスル
源ヲ數多ク時日ト非常ノ勉強トヲ以テレ而レテ其效
績ノ見ル迄ニハ限りテキ苦難ヲ凌カザル可ラス勿論
氏ハ一度ニ其事ノ正確ナルヲ明知シ之ヲ支那政府ニ

大
女
官

照會セシ後、之ハ審査ニ審査ヲ重シ議論ニ議論ヲ尽シ
支那官吏ノ所為ノ疑ハシキモ諸ノ報雜ヲ冒カシテ其
過ヲ發見シ而折撓マズ以テ其事ヲ貫徹ス故ニ官吏ノ
不正行ヲシテ屢、方正者實ノ所為ニ交セシムルコトアリ
ト云夫ノ千八百六十八年ニ於テ氏カ英國人厦門造船
会社ニ其船用具ノ無稅輸入ヲ免許セラレシコトヲ合
衆國公使ノ招ムヲ待タスレテ直チニ福建總督ノ手ヲ
徑テ之ヲ支那政府ニ建言セシモ亦此方法ニ依ルモノ
ナリ該件ハ多ク合衆國領事館ノ擔任セシ所料ルカ後
チ之ヲ北京ニ上訴シ同所ニ於テ又數多ノ時日ヲ過
シ衆目ノ見ル所到底成就スベカラサルコトナリレト雖
モ遂ニ數月ノ後ケ氏ノ志カニ因テ之ヲ貫徹スルヲ得
タリ又香港上海銀行ヨリ上訴セシハ事件ノ如キモ

内五

北京ニ延滞スルコト三月ナリレカ是亦鬱キニ拘レキ
方法ニ因テ千八百七十五年ニ信ヲセリ「レヤニシテ
シノ暴動ハ一時千八百七十年間天津ヲ擾亂シタル暗
殺事件ヲ再舉スルガ如キ形況ナリシモ千八百七十
一年ニ於テ事全ク鎮定ス此事件ニ付李仙得ノ功勞ハ
米國政府故アリテ之ヲ公布セサリシト雖モ其始末ハ
當時ノ上海新聞紙上ニ明亮ナル事ナリ且此等ニ於テ
氏カ或ル支那顯官ノ異言ニ左袒スルノ書類ヲ予ニ入
レシハ竊モ確實ナル事ニシテ當時此書類ヲ証拠トシ
或ル支那地方官ヲ所刑セシムルハ容易ナリシナルマ
シト雖モ氏ハ決シテ之ヲ公布セザランコトヲ契約セシ
モハト見ヘタリ

合衆國政府ガ支那人ノ外國人及ヒ外國ノ思想ヲ敵視

スル所以ト其外教條ノ要件ヲ掲ケタム 記事一部ヲ刊
行セシハ拾モ世人ガ前條ノ事件ヲ傳聞セシ後々ノ事
ナリキ該書ハ千八百五十八年ヨリ千八百七十一年マ
テ米支兩國間ノ交際ノ形況ヲ以テ末段トセリ
該記事中第四章ハ英人ノ之ヲ読々者ヲシテ常ニ甚ク
愉快ヲ覺ヘシムル如シ其載スル所ハ千八百六十八年
間台灣バンカニ於テ英國領事ホルト氏ト北ノ官商ト
ノ間ニ生シタル重大ナル紛議ヲ詳述セシモノ也シテ
當時李氏カ双るノ為ノ至當ノ助カヲ與ヘタルニ付
テハ帝ニ英政府ノミナラス 福建總督ヨリモ亦懇尾ヲ
シ謝辭ヲ受ケタリト云
英國領事ジユシゲブソン氏トア、島事トノ間
ニ葛藤ヲ生セシ後々千八百六十八年十一月二十日

办十二

ユトテナントゴルドン 該島ノ砲撃セシ一茶モ亦前
記事中ニ詳カニシテ就中家モ有テ事ナリ然レ李
氏ハ直接ニ該件ニ關係セシ 亦殊ニ此紛議ニ預ル
ノ利益ナキノミナラスト身ゼテラノ地位ニ在テ其
政府ノ関與セリル事件ノ一方ニ當ルベキ謂レナキヲ
思フガ故ニ勉メテ之ヲ避ケシト虽モ然レ外國人一般
ノ鴻益タルデブソン氏ノ所為ヲ不問ニ指ケルヲ見
ルニ至テハ氏又其助カヲゲブソン氏ニ與フルヲ怠ラ
リリキ加之氏ハゲブソンノ依頼ヲ受ケテ為メニ辯駁
書ヲ作り之ヲ北京ニ呈セシニ今衆國公使又之ヲ英國
公使ニ通知シ遂ニ其言ノ如ク判決ヲ得タリ當時サレ
アルハアルコソク (公使) 氏ヨリ本國政府ニ通達セシ長
文ノ公翰ハ當テ之ヲ世ニ公ニセザリシト虽モゲブソ

シ氏ノ説ヲ聞キタル人々ハ千八百六十九年同密カ
ニ其抄書ヲ傳フルヲ得タリキ其同氏ガ、デアソレ氏ノ
罪ヲ免スヘキ旨ヲ論セシ説云ク

廈門在勤合衆國領事ゼ子ラニリゼントムヨリ本邦
駐劄ノ合衆國公使へ上書セシ意見左ノ如シ
天津條約制定以來台灣ニ在勤スル領事官ノ地位ハ
頗フル困難ヲ極メ名湾府廳ハ如何ナル大害ヲ行フ
モ決シテ罰報ヲ蒙ルナシト信スル如シ元來本土
ハ北京ヨリモ亦福州ヨリモ甚ク遠隔ノ地ニ在リテ
島中ノ人民ハ皆支那浮浪ノ徒ナルカ故ニ之ヲ管轄
スルノ法モ極メテ容易カラズ彼等皆地方官長ヲ蔑
視シ毫モ其令ヲ聽カサルヲ以テ例ノ因循古息ナル
支那法ハ常ニ無用ニ属セサルヲ得サハナリ斯ノ如

女
十也

クナレハ同氏(氏ヲ云フ)ガ尚ホ少シク躊躇スルナラバ
ハ遂ニ如何ナル變事ヲ來スヘキモモ知ルハイエンタ
ルイ一既ニ此地ヲ去リ外國ニ居留也ハ一般ニドク
トルマクスウエルノ不齊ヲ分テテ均ク屠殺・街ヲニ
在ルヲ知ラニト

今夫レ地方ノ有様ト化外人民ノ状態トニ通曉セシ
聰明光練ノ人ニシテ此危難ノ計リ難キガ故ニ決然
タル處置ヲ施スノ必要ナル趣意ヲ演ヘラル・コト
斯ノ如シ是レ實ニ確乎明白ナル証拠ナリ是ヲ以テ
見ルニ今番ノ事件ハ嚮キニ閣下ノ大命アリシ如ク
偏ハニ軍艦ノ保護ヲ仰キタルヲ許セシ非常ノ処分
ニ外ナラサハナリ云々

ゼ子ラル恐仙得カ米國官吏タル職務ノ外ニ尚ホ自カ

ラ勉勵刻苦スル所アリレハ豈ニ唯是等ノ数事件ノミ
ナリシヤ然ルニ氏ノ斯ル忙務ノ際モ偶少シノ餘暇ア
ル時ハ又當時ノ高尚有益ナル問題ニ付其意見ヲ本国
政府ニ報道スルヲ常ニ怠ラサント云
千八百七十三年ノ始メ合衆国大統領ゼ子ラルガラ
トハゼ子ラル李仙得ヲシテブーノスエーリスノ駐劄
公使タラシメントシテ指名シテ上院ニ稟請セシニ此
時偶、ゼ子ヅハ盟約ノ議事アルニ會シ敢テ他事ヲ願ヒ
ルニ違アザルヲ以テ空ク之ヲ机上ニ止メ遂ニ具事
及バ、ザリキ氏ノ朋友ノ是等ノ事ヲ聞クヤ直チニ
之ヲ氏ニ通知シ大統領ハ氏ヲシテ必ス此ノ使命ヲ奉
セシムヘキヲ信認スルガ故ニ速ニ米國ニ歸リ、セン
ヲ勸告セシカバ氏モ亦深ク是等ノ状態ヲ考量シ漸ク

東洋ノ事業ヲ止ムルニ決心セリ南支那ノ居留人等此
事ヲ知リテ大ニ氏ノ別ヲ惜ミ為メ、懇篤ナル賞状ヲ
授ケ又金五百ポンドノ金券ヲ教育府ノ通商局ニ送り
氏ノ帰國ノ後之ヲ授ケテ以テ或ハ其朋友ノ欲スル
所ニ供セラレトシテ望メリ其賞状ニ云ク

於廈門千八百七十二年十月四日

廈門在留合衆国領事ゼ子ラルレ、ダブルナリゼンド
ル貴下ニ拜啓ス

余輩之ヲ聞ク卿ハ將ニ合衆国ニ向テ別離セントスト
目テ余輩ハ却テ奈途ニ先立テ此ニ廈門及ヒ台湾ニ在
住スル一般公衆ノ為メニ計ラレタル卿ノ功勞ニ對シ
公ニ余輩ノ謝辞ヲ卿ニ陳述セント欲ス
抑、卿ノ偉勲ノ歸ルニ所余輩凡テ其德澤ニ浴セサル若

ナレト虽モ就中竊モ卿ノ功カニ因テ得タル拔擢ナル
鴻益ニ付テハ余輩此ニ其一ニテ再述スルモ果シテ其
罪ヲ寛恕セラルベキヲ信スルナリ
夫ノ猛惡無愆ナル奴隸賣買ノ如キ之ヲシテ今ニ現存
セレノナリハ其害廣ク江湖ニ流傳シ外人ノ汚辱此上ナ
カリレモ幸ヒニシテ之ヲ廢絶スルヲ得タムハ軍ニ卿
ノ功勞ナリト云ハサルヲ得ザルナリ
又台湾ニ在テハ卿ハ蕃民ノ為メニ難破船水夫ノ屠殺
セラル、ヲ救テ支那官吏ニ逼リテ奉犯人ノ所刑ヲ求
ル自ラ討伐ノ事件ヲ助テ竊没ニ於テ該地ノ扼要ナ
ル種族ト條約ヲ完結セラレタル斯ル恩惠ヲ蒙ルモ必
竟皆英國船ノ為メニシラル後其條約ノ明カニ遵奉セ
ラル、ヲ見ムハ余輩酒フル喜悅ニ堪ヘザルナリ今ニ

内十八

於テ航客ノ安然此地ニ上陸スルヲ得ルハ偏ヘニ卿ノ
賜モノナリトス
卿又余輩ノ不幸ナル姻友領事デブソン氏ヲ救援保護
セシレシハ余輩常ニ其恩惠ノ厚キヲ感戴セリ猶ホケ
トルビルト氏等ノ台湾北部ニ於テ暗殺ヤラレシ時ニ
當リ卿ノ厚情ナル援助ヲ受ケタル事ハ余輩之ヲ肝ニ
銘シテ忘レサルナリ
輓述「レマンレン、フレ」ノ暴動將ニ危険ナラントスルニ際
レテモ卿ハ又大ニ余輩ノ安全ヲ警戒保護セラル、所
アリレテ信ス
余輩社会ノ幸福ヲ企カラシムハキ事件ニ甘テ卿ノ遠
大ナル助カヲ與ヘテ、一既ニ斯ノ如シ余輩何ゾ之
ヲ喫謝セザルヲ得ンヤ故ニ余輩ハ今將ニ卿ニ別辭セ

太政官

シトスルニ際シ此ニ永ク洪庇ヲ記念スルノ微意ヲ表
セシトス當國固ヨリ不便ニレテ余輩欲スル所ノ適宜
ノ表辨ヲ得ルニ容易カラサレカ故ニ則チ仰育府通商
局ノ手ヲ徑テ些少ノ金卷ヲ御ニ呈セリ請フ之ヲ以テ
厦門ニ在ル卿ノ辱友ノ記念ノ徵候ト認メラレハ幸
ニ甚カラレ

此ニ卿ノ平安ヲ祈リ併セテ後ケノ功名ヲ希望ス頓首
敬白 エニスレトステヘンヌ
ホイド社中

ジョーパシルソン
ジョーノーツ
ジョーイン、フホストル社中

ブラウシ社中
エルリス社中
ジョーグステン、ヒールド社中

エト、エト、バツド
ジョーイン、エ、アンデル
アール、ビー、バ、トシ 再拜

廿七

ゼ子フルレゼンドルルカ日本政府ノ臺灣ニ事アル
初テ知リシハ本國ヘノ途上横濱ヲ過キレ時ナリ氏
嘗テ日本駐劄米公使デロング氏並ニ日本政府ニモ嚮
ニ琉球人ノタメニ臺灣ニ到リシ事ヲ通告セル一ナク
亦デロング氏ニハ一面ノ識モナカリシナノ然ルニ今
桑港ニ向テ錨ヲ拔シトスル大平海郵便汽船「ヤパン」
号ノ船室ニ在テ午後十一點鐘米公使ヨリ書柬ヲ領シ
タリ其書ニ曰ク

外務卿ヨリ私カニ聞ク所ニ據レハ當政府ニ於テ臺
灣征討ノ舉アリ琉球人ニ害ヲ加ヘシ島人ヲ罰スル
タメナリ是下ハ嘗テ是ニ類スル事跡ヲ以テ支那政
府ニ接シ是等ノ情実ヲ詳ニセラルヘシ余ハ甚タ暗
キヲ以テ莫クハ未次ノ出船ヲ期シテ此ニ止マリ余

宮

高教ヲ受レ給ハ、幸甚之ニ過ス若シ能ク可ク
シハ余ヲ助ケテ日本及其他人氏ノ大ナル不幸ヲ醸
スヘキ政府ノ企圖ヲ猶豫ニシムルヲ得ハ我政府ニ
對シ是下ノ功勞タルベキヲ信ス不宜

於合衆國公使館

千八百七十二年二月廿二日

ゼ子ラレレゼンドル貴下

是ヨリ先ニゼ子ラレレゼンドル氏ハ危難ト勞費トヲ
顧ミス臺灣ノ弊習ヲ一洗セント勉メシ事アリ北京ノ
米公使ガ氏ニ援助ヲ與ヘサルヲ以テ此事成ラス遂ニ
宿志ヲ果サスレニ今支那ヲ去ルノ途ニアリ蓋シ其志
ヲ果サバリレハ氏ノ大ニ遺憾トスル所ナリ然ルニテ
ロング氏ノ書柬ヲ一覽シ豈料ランヤ支那人ニ依ラ遂

夕十八

テント欲セシ企圖ヲハ外人ニ依テ遂ク得ヘキ望
外ノ機會ヲ得タリ是ニ於テ直チニデロング氏ノ請ニ
應シタリ此時ニ當テ同氏トデロング氏トハ更ニ相識
ナク且ツ同氏ハ初メヨリシテ間接若クハ直接ニ日本
政府ノ知過ヲ得ント欲セシトナシ外務卿副島氏如
何ニシテ同氏ト交通セハ可ナランヤ頗ル思慮ヲ如
セトモ其所ヲ得ス尤モ副島氏ハ千八百六十七年及九
年レゼンドル氏ノ臺灣ニ到リシ事ヲ聞知セシト雖モ
千八百七十一年ノ最後ノ如キハ嘗テ聞知セサリレナ
リ諸デロング氏ハ同氏ノ請ニ應ヒシトテ副島氏ニ報
シ十月五日同氏ニ書ヲ與ヘテ曰ク
外務卿閣下本日六時足下ト余トテ請フテ晚餐ヲ俱
ニセシトテ約セリ足下意ニ適セハ余ハ五時半ニ駕

大 女 官

ノ具ヘテ足下ノ令スル所ニ至リ相伴フベシ頓首

レゼンドル貴下

シ、イ、テ、ロ、ン、グ

セ子ヲルレゼンドル氏ハ日本外務卿副島種臣ト初メ
テ面會ノ後幾何モナク日本皇帝ノ政府ニ職ヲ奉ヒシ
トテ懇望セラレタリ氏ハ此薦擧ヲ以テ甚々歡喜セシ
ト虽モ恭シク之ヲ固辞セリ蓋シ之ヲ回辞スルニ種々
ノ事由アリタリ第一ニ本国ノ職任ヲ解キ益スル所ナ
キノミララス大ナル危険ヲ冒サ、ル可ラス氏ハ多年
ノ間合衆國ノ官吏トナリ大統領グラント及當時ノ内
閣ニ深ク信任セラレ本国ニ歸ルトキハ使命ヲ拜スヘ
キハ當時甚々明々ナリシ然レハ氏ハ何ヲ以テ日本ニ
留マラルヘキカ日本ニ泊テハ合衆國ノ外使節ニ給人

夕十

ル如キ些少ノ俸ト公使ニ等シキ位階ヲ以テ氏ヲ聘セ
ント欲セシナリ且ツ之ニ應スルトキハ自ラ豫防シ能
ハサル過誤ノ責任ニ當ラサル可ラス又支那ニ於テ嘗
テ得タル聲譽ヲ或ハ失フヘキ事アルヲ知レリ茲ニ再
ニ外務卿ハ招聘ニ應ヒシト請ヒシト虽モ氏ハ惟ラ
ク猶厦門合衆國領事ノ職ニ在ルヲ以テ本国政府ノ許
可ヲ得ルニアラサレ、其職ヲ解ノベキ權利ナシト然
レトテ遂ニ日本政府ノ賓トシテ一月間日本ニ留マリ
政府ノ顧問ニ應ヒシトテ諾セリ尚此時ニ當テテロシ
ラ氏ハレゼンドルノ永ク日本ニ留マラントテ勸メテ
止セヌ十二月十八日書ヲ與ヘテ曰ク
余ハ深ク足下ノ尽力ニ回テ日清兩國ノ和ヲ保全ス
ベキヲ信ス且ツ日本ノためニ請フ所ハ足下奉命ノ

女

結局如何ニ於テ我及開明諸國ノ密接ナル關係ヲ
ルヲ以テ余ハ切ニ足下ヲ勸メ速ニ合衆国政府ノ職
任ヲ解キ日本皇帝陛下ノ榮光ノ所ノモヲ受領セ
ラレシコトヲ若シ足下意ヲ決シテ是ヲ承諾シ而シテ
我政府余輩ノ志意ヲ深ク覺ルニ至レハ余輩ノ為ス
所ノ大ニ嘉ニスベシト余ハ更ニ之ヲ疑ハス抑日本
ノ国史ニ於テ他邦人民カ斯ノ如キ顯榮ヲ以テ招聘
セラレシハ足下ヲ以テ初トス足下一身ノ面目タル
クミナクス間接ニ於テ我政府ノ面目ト云フ可レ足
下此ヲ注意セラレシヲ信ス今若シ是ニ應セハ一二
忠実ヲ以テ日本政府ニ奉事シ兼テ我合衆国政府ニ
信任ヲ及ホサシメコトヲ是レ切ニ余ノ足下ニ望ム
所ナリ

内 三十一

今余ノ忠告セシ所以ノモノハ足下ノ方向ニ於テ幾
少影響アルベキヲ信シ此ニ再ニ奉命セラレシコトヲ
懇願ノ至ニ堪ヘス頓首再拜

チヤールス、イ、デロシグ

遂ニレズンドルハ聘ニ應セシガ果シテ人ノ先見ノ
如ク合衆国政府此舉動ヲ喜ハスフヒシユ氏ノ如キハ
不快最モ甚シク書柬ヲ草シテ曰クデロシグ氏ハ世子
ヲハズベンドルノ合衆国政府ニ職ヲ奉スル実情ヲ塗
抹シ日本政府ヲ詔キレズンドルノタメニ日本皇帝ノ
頭爵ヲ得ント欲シ其威權ヲ弄シ詐言ヲ構ヘタリト尤
モフヒシユ氏が此書簡ヲ草シレハ十二月廿日ニシテ
未タデロシグ氏ノ日本外務卿ニ贈リシ十二月十六日
ノ書簡ヲ受領セサリシ以前ナリ則此書簡ニレズンド

大 文 官

ル氏ハ合衆国政府ノ文官タルヲ明瞭ニ記セリ如左
貴政府ニ於テベネラルレズンドル氏採用ノ儀ニ就
キ明治五年十一月十八日ノ華翰正ニ領收セリ今拜
復ニ臨ミ慈テ閣下ニ教ス小官即時ニ高教ヲレゼレ
トル氏ニ傳ヘ並ニ合衆国政府ノ職ヲ解キ勅諭ヲ
奉セシメテ同ク勸メシ処本日是ニ回答シ第一ニ支
那厦門駐勤合衆国領事辞職ノ儀ヲ改ニ小官ニ稟請
レ第二ニ高命ニ應ヒシ旨ヲ小官ヨリ閣下ニ教ヒシ
テトク亦托セリ頓首謹言

於合衆国公使館

シ、デロング

千八百七十二年十二月十九日

外務卿副島種臣閣下

内三

今ヤベネラルレズンドル氏ハ日本政府ニ勤仕シ
第一着ニ建議セシハ支那ニ使節ヲ遣リ支那政府ハ臺
灣事件ノ責ニ任スベキカ其意見ヲ問ハシムルニアリ
副島氏此任ヲ受ケレズンドル氏之ニ随行ス此時ニ當
リ北京ニ於テ朝見ノ論議大ニ沸騰シ今其高點ニ達シ
恰モ使節ノ着セシハ是ガ一分ニ加ハルベキ時ナリ
余輩己ニ教セシ如クレズンドル氏ハ千八百七十一年
ノ貿易交通（書名）ニ於テ意見ヲ縷述セシテアリテ之ガ
タメニ北京在留米公使ロウ氏ト不和ヲ生シタリ此ニ
於テロウ氏ハ日本大使ニ随フテ北京ニ入ルヲ妨
ケント欲シ術計ヲ施ス一ニシテ是ラズ十一月廿六日
デロング氏ニ贈リシ書簡ニ曰ク
支那ニ使節ヲ遣リ我國人ニ是ガ副使ヲ命スル議題

太政官

ニ於テ感ムラクハ余ハ足下ト大ニ其説ヲ異トニス
ルヲ今若シ使節ヲ送り目下ノ論件ヲ定決スルヲ得
ベシト假想スルノ事由アラシメハ之ニ米人ヲ同伴
セシムル事ニ於テ其害又少ナルヘシ假令斯ノ如
キ理アラシムルモ猶相容レサルノ説甚々多キニ曰
リ到底余ハ斯ノ如キ奉動ヲ可怒スルヲ得ス
ロウ氏ノ同ク信セシハ若シ副島氏朝見ヲ許サレサル
トキハ和好ヲ破リ開戦ヲ宣告スルノ命ヲ奉セリト斯
ノ如キハ固リ根柢ナキ巻説ナレトモ副島氏ハ却テ此
巻説ノ少効驗ヲ生スヘキヲ思惟シ其訛傳タルヲ
證明セサリシ亦當時北京ニ流言アリ曰クロウ氏ハ皇
帝ノ朝見ヲ許サレトキハ該府ヲ去ルノ命ヲ受ケタ
リト此事ノ虚実ニ至リテハ更ニ確知スルヲ得スト虽

モ北京政府ノ是ヲ信セシハ甚々明カナリ此情実ヨリ
シテ總廷衙門ニ於テロウ氏ニ大ニ威權ヲ添ヘハ誇
揚大言シテ曰ク余若シ北京ニアラサルトキハ諸公使
ノ朝見ハ逐ニ行ハレサルヘシトレゾンドル氏ハ朝見
ノ紛議未タ決セナルノ際タルヲ以テロウ氏ノ大言ヲ
省セス然レトモレゾンドル氏北京ヲ去テ後日本大使
ハ佛魯公使ト共ニ約議ヲ定決スルニ力多キヲ確知シ
北支那日々新聞ニ一編ヲ投シ副島氏ニ属スル声誉ヲ
表明シタリ抑應接ノ初ヨリロウ氏ノレゾンドル氏ヲ
猜忌疑憚スル最モ烈クロウ氏ハ之ヲ辞色ニ現ハスノ
ミナラス自己ノ書信ニ於テ同職使諸公ニ於テアルモ氏ト
説ヲ同フスト言フニ至リテハ輕^薄甚シキモノト云
五月十三日フシニ氏ニ贈リシ書ニ曰ク

長
女

尚足下ニ告クベキ事アリ此件ニ付キゼ子ラルレセ
シドル氏ノ挙動ハ我同職ニ甚々不快ナル志想ヲ生
シ波等ノ猜疑ヲ愈深カラシメタリ若シレビシドル
氏支那大臣ト接ルニ當リ一層謹慎ヲ加ヘサルト
キハ恐クハ日本ノ大害ヲ醸スベシ

然レニ実情ニ於テハウエード氏及ロー氏ヲ除クノ外
公使ノ一人トシテシンドル氏ヲ猜疑スルモノナキ
而已ナラス最モ才幹フル一人ハ同氏ノ使余ヲ果スニ
當リ却テ之ニ援助ヲ與ヘタリ故ニシンドル氏ハ此
トニ至レマテ其厚誼ヲ忘レステ曰ク若シ此援助ナ
キトキハ副島氏ハ充分ノ功ヲ奏セサルベシト蓋シレ
ビシンドル氏ハロウ氏ノ如キ人物ヨリ及論ヲ受ケ退縮
スルノ士ニアラス且ク豫メデロング氏ヨリ北京外交

内

三十三

ノ甚レキ抵抗ニ逢フベシト通告セラレ又ロー氏ト
己ニ相和ス可ラナルヲ知レハ副島氏ニ告クルニ断然
主義ヲ執テ更ニ動カサルヲ以テシ然レドモ其実ヲ告
シニ副島氏ハ此助言ヲ要セサルベシ同氏ノ支那大臣
ト接スルニ當リ其剛直才幹ト公使一人ヨリ得ル
援助トヲ以テ終ニ其目的ヲ達セリ同氏ハ頗ル敬重セ
ラレ皇帝ノ第一ノ親見ヲ得且總理衙門ヨリ琉球人ヲ
害セシ臺灣土人ヲ日本ニ於テ罰スルノ権利アルヲ表
スル答辞ヲ得タリ

千八百七十三年八月レビシンドル氏ハ副島氏ニ送フテ
東京ニ歸リシ処ロー氏トノ不和ヨリシテ亦此ニ於テ
更ニ豫考セガリシ方面ヨリ種々ノ妨碍ヲ受ケロー氏
ノ合衆國ニ歸ルヤ日本ヲ過キ相遇スル殆ト各人ニ

女

語ルニレゼンドルノ事ヲ以テシ只管同久ノ名譽ヲ毀
傷マシテ池メタリ是等ノ誣陷ニ根シ東洋ニ在テ外
國ノ公利ヲ護シ多少有用ノ年間ヲ消セシレゼンドル
氏ハ却テ之ガ一大警敵ヲ以テ過視セラレ頗ル及論ヲ
受ケタリ然レトモ或事情アリテ日本ヲ去ルヲ得サル
ニ因リ敢テ其心カヲ尽シ是ニ奉事シ其後副島氏ノ退
クニ當リ共ニ退カント欲セシカ副島氏同氏ニ懇望シ
猶其職ニ止マリ政府ヲ助ケテ臺灣ノ紛議ヲ整定シ
テ清ヘリ此時同氏ハ臺灣島ノ紀事ヲ整頓シ處々ノ
池誌等ヲ作レリ風評區々ニシテ大ニ反對ノ説アレド
モレゼンドル氏ノ職ヲ修ムルニヨル氏ガ周邊ニ行動
スル事必ク更ニ意ニ関セサリシハ公報ノ知ル所ナリ
千八百七十六年同氏ハ臺灣ノ筆記ヲ草了シ大藏卿

内
三

請ニ仍テ蕃地事務局ニ呈セシハ政府ニ辭職ヲ稟請
シ寔ニ日前ナリ抑モ日本政府ノ証臺ヲ決セシハ左
賀反乱ノ直チニ前ニシテ此時レゼンドル氏ハ甚ク沈
着戒慎セテ以テ必ス同氏ハ征臺ニ加ハラナルベシ
ト云フ者アル一呈レリ大久保及大隈氏ハ臺灣ニ兵ヲ
遣ル籌策ヲ議スルタメレゼンドル氏ヲ見ント欲シテ
書ヲ贈レシ然ルニ同氏ノ敵人ハ日本政府ノ遂ニ臺灣
ニ兵ニ遣リシハレゼンドルノ為ス所ト云ヒシヤハシ
メシレ編輯者ホーラエル氏ノ如キハ龍動タイムス新
聞ニ報シテ曰ク
大使帰朝後レゼンドル氏ハ兵ヲ臺灣ニ送ルノ緊切
ナルヲ以テ頻ニ外務卿ニ迫マレリ
斯ノ如キハ妄誕ノ窟ニ甚シキモノトスアズベシレ

女

ドル氏ハ巖倉氏ノ政洲ヨリ帰朝後兵ヲ臺灣ニ遣ルノ
急ナルヲ外務卿ニ勸メシテナキ而已ナラハ當時外
務卿ヲ見シテダモナシ同氏が始メテ外務卿ニ謁ヒシ
ハ臺灣ニ航スルノ命ヲ奉シ長崎ニ向テ發セントスル
前日太政大臣ノ関キニ別ノ筵席ニ於ケリ尤モ此時
同氏ハ已ニ外務省ノ一吏員タリシハ疑ノ容レスト虽
モ副島氏並任後ハ私邸ニ於テ事務ヲ辨理シ此時マテ
後任ノ寺島氏ニ謁スル機會ナカリシナリ
日本ノ記録ヲ得ルノ難キヨリ千八百七十四年ヨリ退
任ノ時マテレビンドル氏ノ履歷ニ就キ看ル所甚々少
シ同年五月征兵ノ長崎ヨリ發セルトキ上海ニ於テ流
言スル言ニ拠レハレセンドル氏ハ日本政府ニ勸メ突
用ニ適スルヨリモ多過ノ兵員ヲ遣ハ波ノ地ニ於テハ

内

三十五

ニ七月ニ於テ熱度盛ナルニ此時期ニ之ヲ發シ酷烈
ル炎暑ニ曝ラシ非常ノ艱苦ヲ受ケシノ多クノ生命
損シタリ又一方ニ於テハ後ニ支那府ノ疑惑ヲ起シ
更ニ益スル所ナシト喋々同氏ヲ批評シタリ然レトモ
証臺ノ全權ヲ任ル日本大臣トレビンドル氏ノ初テ曾
ビシハ千八百七十四年一月ナリ而シテ出發ノ延滞セ
シハ佐賀死ハト米田公使が戒然之ニ干涉セシトニ因
レリ若シ是等ノ妨ケヲ受ケサルトキハ二月下旬ニ已
ニ臺灣ノ兵營ニ在ルベシ若シ又レビンドル氏日ラ之
ヲ定ムルキハ前年ノ十一月ヲ以テ期トスベシ故ニ
延滞ヲ生シ禍害ヲ増セシハ其罪日本政府若クハレビ
ンドル氏ニ在ラスレテ寧ロ偶然ノ時機ト云フ可シ又
多過ノ兵員ヲ遣リシトノ批判ニ於テハ日本兵が突撃

女

遭遇セシ所ノモノハ傍評ト大ニ異ナレリ且豫メ不
虞ノ備ナカル。可ラスレゼンドル氏ノ臺灣地圖ニ於テ
十八社ノ同盟ト「若シ緩急アレハ一酋長ノ下ニ合從ス
ルヲ以テ斯ノ名ニケシモノナリ」稱セシ地ノ西ニ當リ
兩丘ノ間ニ介マリ凡ソ平方十九英里ノ幅員ヲ以テ長
延ノ地アリ其名ヲ琅瑤ト云フ此地ニ混_合人種ノ村落
散布シ火繩銃腰刀投鎗等頗ル銳利ナル兵器ヲ具シ山
谷ノ戦ニ長シタル戦卒五千二百四十四人ヲ集ム可
ク八百六十七年ホルン及ピツケルリング氏ノ詳密ニ
調査シタル人_口ニ於テハ同盟社ニハ平方五十九英里
ノ間ニ二千五百八十人ノ壯丁散在シ亦利益ヲ具シ戦
術ニ長コリレゼントル氏ハ則ニ教ヲ以テ征討都督
卿中將ニ報告ス

内

二十八

征兵ニ随行シタル「ウエストポイント」ノ卒業生佐官ロ
ソシ氏ノ報告ニ於テハ同盟社ノ火繩銃ヲ具スル戦
二千三百六十人ナリ同氏ノ琅瑤地方ヲ探偵セシハ僅
一小部ニ止リシニ因リ琅瑤人口ノ精算ヲ得ガリシ
始メ日本兵上陸ノ日ニレゼンドル氏ノ處置ニ依テ混
合人種全部ノ酋長等日本兵ニ投シ教日ヲ經スレテ又
二千三百六十人ノ生蕃戦丁ノ内千六百七十三人降
セリ是等ノ蕃人ハ日本ノ兵伍ニ加ハラスト虽モ之ヲ
統轄スル酋長等ハ日本人ニ示諭スルニ地理國形等ノ
事ヲ以テシ心術上ノ援助ヲ與ヘタリ是ヲ以テ若シ一
夕ヒ事ヲ誤レハ彈丸飛箭ノ外ニ水流ニ毒ヲ注ク等ノ
方畧アルセシ十七人ノ敵兵ニ當ラサル可ラス然ルヲ
位ニ六百八十七人ニ止マリ亦容易ニ之ヲ敗スルヲ得

リト虽モレゼンドル氏ノ策成ラサルトキハ日本ノ
臺灣ニ送り兵員三千ノ内一人トシテ無用ニ属スル
モノナカラン可シ

外交通信記及ホアウス氏征臺記事ヲ案スルニレゼンド
ル氏ハ征臺兵ニ伴フテ長崎ニ至リ詠兵ノ發スルマテ
此地ニ留マリ千八百七十四年五月東京ニ帰ルベキヲ
命セラレ此時ヨリ司氏ハ日本政府ニ於テ其心カヲ空
フシテ智能ヲ振ヒシト惟ハル而シテ余輩ハ其勞苦ノ
果シテ功績アリシヲ疑ハサルニ就キ同氏ハ今之ヲ回
顧スルモ決一テ悔ユルコトナカル可シト信ス此時ニ當
テ外交家ノ一團各本国ノ權勢ヲ振成シ或ハ一身ノ意
見ヲ旨ニシ或ハ外人ニ蠱惑セフレ征臺ノ舉ヲ妨ケ
トスル一ニシテ之ヲス一時ハレゼンドル氏モ英才

膽ノ長官大隈ハノ外人ニ放シヒラレ其困難實ニ
フ可シ而シテ日本ヲシテ瀕瀕 誹ヲ受ケレマス
其勳譽ヲ宇内ニ布キ北京ニ於テ遂ニ大久保氏ノ大功
ヲ奏スル一 於テ氏ノ勤勞勲ナカラサリシハ世人ノ
信スル所ナリ然ルニシヤパンガゼツト及エフジユレ
ヤボシテヲ除ケノ外横濱ノ外国新紙ニ於テ謗語誣証到
ラサル所ナカリシハ抑氏ヲ評スルノ正シキモノト云
フ可キカ余輩辯論ヲ費ヤスヲ用ヒサルナリ
同年七月レゼンドル氏ハ福建ノ總督ニ就テ臺灣關係
ノ事務ヲ查辦スルタメ日本皇帝ノ特派委員ヲ命セラ
レタリ然レトモ未タ使命ノ件ヲ查辦スルニ及ハス上
陸後上海ノ各國總領事ニワルド氏ノ命ヲ以テ合衆
國海軍兵ノタメニ逮捕セララル尤モ其後合衆國々務卿

ヨリ公翰ヲ以テ深ク逮捕ヲ咎メテリ
然レトモ日本政府ハ此件ニ付キ如何ナル処置ヲモ施
サス実ニ等閑ノ罪免ヌカス可ラス國務卿ノ承認スル
所ニ拠レハ逮捕ハ明法ノ捕牒ナカリシニ目リ報償
ヲ求ムルノ権利アルハ甚ク明カナリ然ルニレセンド
ルハ合衆国政府ニモ日本政府ニモ更ニ請フ所ナク
逮捕ノ時ニ於テ憤怒ノ言ヲ吐カス唯同氏日本ノ官吏
トシテハ之ニ加ヘタル無礼ノ法律ニ背ケルヲ陳シ
又合衆国ノ人トシテハ逮捕ヲ命シタル官廳ノ過大
ヲ悔ユルノ言ヲ述ヘタリ蓋シ合衆国政府ガ此過失ニ
對シ自ラ報償ヲ成スヘシト期望スルハ友誼交情ヲ負
ムノ甚ク過キタルモノト云フベシ同日政府ハ日本ノ
タメニ謀リ怒頭亨セツルド氏ニ下シタル譴責書ヲ

内

表シ此件ヲ查辨スルヲ以テ是
ニ出ルトキハ施スベキ所以テ
是ヨリ多クハ之ヲ人ニ待望ス可シナルナリ
是レ事由テ合衆国ニ向テ報償ヲ求ムルハ日本ノ
タメニ便益ナシス或ハ至当ナラザルトキハ獨リ日本
ノ施スヘキ至公ノ所置ハ自ラ報償ヲ求フニアリ然ル
ニ一事ノ此ニ及ビシトナシ抑日本ノ用役スル外人ニ
對シ其義務ヲ尽サス特ニ此面ノ如キ深ク愛敬スル
臣ノ大任ヲ擁スルニ當リ其身ニ蒙ハリタル非曲ヲ恬
然顧ル所ナキハ余輩已ムヲ得ス一言セザル可ラス而
シテ支那人ガ傭役人ヲ過スル所以ト之ヲ比較シ本編
ノ趣意ヨリモ余輩ハ日本ノ声名ノタメニ之ヲ悲ムナ
リ蓋シ日本ノ批評ヲ受クベキハ尚此ニ止マラス外務

御寺嶋氏ハレゼンドル氏カ皇帝陛下ノ特派委員トナ
リ使命ヲ奉ヤシトテ支那政府ニ通告スルヲ急リ実ニ
慨歎ニ堪ヘサル失錯ヲ行ヘリ故ニセワールド氏ハ若シ
當然ナル通告ヲ領セシトキハ決シテ逮捕ノ令ヲ發セ
サルヘシト陳スルノ辞柄アリ必ス實際ニ於ケル斯ノ
如クアリシナラン且ツ弊害ノ及フ所此ニ止マラス若
シレゼンドル氏福建ノ途上ニ在テ頓ニ日清間ニ戦端
ヲ開クトキハ寺嶋氏ノ疎漏ノタメ福建總督ハ同氏ヲ
捕縛シ間諜トシテ糾弾シ刑律ニ處スルノ權アリ此時
司氏ノ豫ニ、ル委任書ハ用ヲ成サス必竟此書東ハ奸
計ヲ行フタメ携帶セシメタル偽書ナリト断言スルノ
權利アリ而シテ此說ヲ愈堅実ナラシムルモノハレセ
シドル氏逮捕ノ時ニハ戰畧ヲ一ハヒラレタクト公言

内

二十九

ゼンダグハム氏ノ說ハ余輩此ノ実否ヲ明言スルハ
ハストムモセヨルド氏ハ深ク之ヲ信レゼンドル氏
ハ支那ト譽ケテ聞ントスル大謀ニ興シ臺灣ニ赴ク路ニ
アリト思惟シナリ此嫌疑ヲ蒙リシ一事ニ於ケルモ
日本外務卿ハ大ニ逮捕ノ責ヲ負ハサル可ラサルニ付
キ愈以日本政府ヨリ同氏ニ報償スルノ義務ナカル可
ラス
此頃總理衙門ニ於テ用役セシ外人ヲ遇スルノ道ハ実
ニ優渥ト云フベシ獨リ頭達ノ地位ヲ以テ旗表スル而
己ナラス亦大ニ豊富タラシメタリ故ニ後未幾急アル
ニ当リ清國ニ質ヲ委スルモノハ皆ゴルドレ及ギウケ
ル氏ノ如ク奮フテ茂難ヲ省ミス其職ヲ尽ス可シ支那
政府ハ一ニ忠誠ヲ以テ職ヲ奉マレ者ニ歡喜シテ其勲

功ニ酬ヒ果レテ此人ハ世人ノ恩惠ス所カスシテ生存
スルヲ得ベ、カヲ洞見スルマテハ敢テ謝絶セス是ヲ
以テ亜西亜人ヲ評シテ既ニ我ニ用ナキトキハ怒テ至
重敬ノ寵者ヲ放棄シ之ヲ顧ムトノ誹謗ハ清人ノ謂
ニアラサル可シ
セワルド氏ヨリカドワラゲル氏ニ贈リシ書ニ曰ク
ゼ子ラレレゼンダル氏ノ逮捕ハ大ニ支那官吏ヲ満
足セシメタリ彼等惟ラクレゼンダル氏ハ全件ノ首
謀者ナリ故ニ同氏ヲ論場ヨリ撤去スルヲ得ハ日清
ノ紛議ヲ完決スルノ便多カル可シト
千八百七十四年ゼネラルレゼンダル氏ハ大久保氏盟
約ノ前ニ京ヨリ去ルヲ命セラレタリトノ風説ハ多ク、
上文ノ訛傳ナル可シ、而リ此説ハ虚妄ナレトモ支那

三封

ガ同氏ヲ去ラシメシハ熱望セシハ疑ヲ容レスホアリ
ス氏証甚紀事ニ言ヘルヲアリ右レゼネラルレゼン
ル氏ヲ撤去スルヲ得ハ支那人ハ若干ノ損費ヲ厭ハサ
ルベシト
同年十月廿五日レゼンダル氏遂ニ北京ヲ去レリ
トモ氏ハ自ラ之ヲ決セシメ甚タ明瞭ナリ此時大久保
氏ト總理衙門トノ爭議ハ既ニ終リ支那政府ハ大久保
氏ノ聞説シタル條款ヲ以テ怒フヘキカ或ハ破好ノ後
難ニ當ルベキカ唯ニ條ノ路アル而已若シ第二ニ出ル
トキハ大久保氏ハ直ニ北京ヲ去ル可シレゼンダ
ル氏ノ別ヲ告ケシトキ之ニ語テ曰ク余一タニ北京ヲ去
ルトキハ決シテ脚ヲ回サ、ルベシト蓋シ大久保氏ヲ
知ル人ハ必ス其言ノ如ク行ヒシヲ信ズルナラン以上

大久保

ハ余輩ガ親シクレゼンドル氏ヨテ聞ク所ナリ
北京ノ盟約後レゼンドル氏東京ニ帰り千八百七十五
年七月七日閉局ニ際シ辞表ヲ上リシ処太政大臣ヨリ
尤ノ答辞ヲ領シタリ

明治八年七月七日ノ華簡披閱並ニ封中ノ宣示正ニ
領収セリ抑足下去明治五年十二月台蕃處分ノ件ニ
関シ我政府ニ職ヲ奉スル以來拮据勉勵シ同六年清
國奉使ヨリ蕃地處分ニ至ルマデ心カヲ尽シ屢籌策
ヲ献シ實地ニ身ヲ勞シ我政府ヲシテ名譽ヲ得ハシ
メタルト云フニ尠カラズ然ルニ處蕃ノ一挙事已ニ終
リ事務局閉鎖ニ際スヲ以テ今迄下職ヲ辞メンコトヲ
欲ス我政府頗ル遺憾ニ堪ヘスト且モ足下ノ志願ニ
應ジ之ヲ容ルベシ然レトモ之下未タ成ヲ全フセザル

付

三十一

事務ヲ整頓セハ二月間ノ暇ヲ賜フベシ然ル後我政
府ニ於テ勤務終リシヲ諒セラレヨ拜復如斯謹具

太政大臣三條實美

シ、タブリエレゼンドル閣下

此時ヨリゼネラルレゼンドル氏ト日本政府トノ關係
ヲ解キタリ其後同氏ハ冬議魚大藏卿ニ附屬セシト雖
モ公務ニアラスシテ一時ノ私約ナリ性々同氏ヲ評ス
ル所以ノモノト異トナリ斯ノ如キ稀有ノ好機ニ乘シ
日本政府ノ大臣ニ接シ私利ヲ進益スルヲ決シテ謀ラ
サリキ同氏ガ皇帝陛下ヨリ領セシ唯一ノ報酬ハ勲二
等ノ賞牌ナリ當時ハ東京ニ於テ退隱シ東洋ニ在テ十
年ノ久シキ間ニ纂集セシ書類ヲ整頓シ緊要ナル公書
ノ翻訳ヲ調正セリ蓋シ此事業ハ米國ニ歸リシ後ハ能

女

吉

ク没事ニ能ハサル所也

